型）のみならず商船（大型）転用の老朽船が含まれていたらしく、ほとんどの板に釘が大量に打たれていた。さらに過剰積載があった。鷹島沈没船の船体には大量の石あるいは磚（煉瓦）が積まれていた。帆柱使用時の安定性のために積むバラスト用の石・磚、つまり重しである。一見すれば、沈むもやむなし、と納得してしまうほどの石の量であった。喫水（船が水に浮かんでいる時の、船の最下面から水面までの距離）は深くなるし、石がごろごろしていては、いったん浸水が始まると、かきだすことは困難だった。老朽船に加え、バラストの過剰積載船が沈んだのである。

のちになって「神風」とされた大型台風は、日本の船も沈めている。九州・本州を横断していったから、田畠にも人家・山林・港にも、甚大な被害を与えた。怨嗟の嵐であって、それを当時の日本人が神風と呼ぶことはぜったいになかった。

中国（当時は元）や高麗に戻った将兵は、戦略ミスではなく嵐のために帰国したとして、敗戦の責任を逃れようとした。大風雨被害は確かにあったが、より強調・誇張されていった。

さて、クビライはなぜ日本を攻略したのか。第一次東征、すなわち文永の役段階で、クビライにとっての至上課題は、宋の打倒である。三〇〇年もの長きにわたって、中華帝国の主として君臨し続けた漢民族の国家・宋（南宋）を打倒し、自らのモンゴル民族の国家＝元をアジア（世界）の盟主とすることが目標であった。

ところが、敵国たる宋を支援し続ける国が日本だった。日本と宋の友好関係（通商関係）もまた三〇〇年に及んでいた。クビライは日本と南宋の同盟関係を認識していて、準備さえ整えば「或いは南宋、或いは日本」に出兵する、と、宋と日本を討つとしばしば発言している。日本は、宋以外の国は戎夷（野蛮国・非文明国）としか認識できなかったし、三〇〇年も親交の続いた国が滅びるなどとは想定できなかった。元については宋から帰国した僧侶からの情報が主で、ほかは高麗経由で得る情報しかなかった。

軍事に関わる輸出品として重要なものが硫黄である。中国・宋はすでに一〇〇年前、西夏（中国北西部にチベット系のタングート族が建てた国）との戦いで火薬を使用している。兵器である火薬は硝石・硫黄・木炭から作る。火山のない中国では硫黄の産出はほとんどないが、火山列島である日本、特に九州には硫黄が豊富だった。日本は宋に火薬材料の硫黄を輸出し続けた。硫黄は軍需物資だから、その供給はぜったいに阻止せねばならない。クビライが宋を打倒するためには、まず日本を制圧し、支配下に置いて、硫黄つまり火薬を敵から奪う必要があった。

蒙古襲来はこのような国際関係のなかに始まった。合戦推移の真相を読み解く史料は、日本・中国・韓国（朝鮮）に多く残されている。それらを総合的に読み解くことが要求されよう。本書では前半にその作業を行うが、後半での素材は絵巻物である『蒙古襲来絵詞』となる。合戦に参加した御家人竹崎季長が、みずから指揮して絵師に描かせた絵巻である。絵詞すなわち絵と詞書からなる。合戦に参加した当事者による絵画史料だから、これにまさる史料はないし、これほどに良質な十四世紀の史料が残されたことは世界的にも例がない。しかるにこれまでの歴史研究がすべてを正しく読解してきたとは決していえない。むしろ逆である。絵巻には帰属位置不明の断簡、つまり前後の接続関係がわからず、迷子になったままの断簡がいくつかあった。巻末に一括されている。これを正しい位置に戻す。その結果、これまで不明であった六月初めの博多湾海上合戦、志賀島潜入偵察などの詳細を明らかにできる。

『蒙古襲来絵詞』には台風（神風）のシーンはまったく描かれていない。多くの武士にとっては、台風（神風）なぞは関係がなかった。季長はこの絵巻にて、武士としての技量・力量を遺憾なく発揮しているが、つねに生命の危険にもさらされていた。文永の役では、なんと敵兵の左目に自らの矢を中てている。きわだった弓の技量だった。しかし新たに現れた三人の敵兵に、わずか一馬身の距離から狙撃されている。瞬時の逆転で、絶体絶命だったはずである。

弘安の役でも、能古島沖海戦、また志賀島潜入と、つねに勇敢に戦い、行動したものの、危機の連続、それを辛うじて切り抜けた。台風後の閏七月五日の合戦には、季長は首級二という、二度の戦いで最も大きな手柄を立てているけれど、それでも決して圧勝ではなかった。彼の腕には矢も中っている。回転しながら刺さる、何寸もある矢尻は、肉をえぐる。重傷であった。その季長の絶体絶命の窮地を救ったのは、友軍の思いもよらぬ奇抜な攻撃である。臭すぎて鼻をつまんでもダメ、目もヒリヒリして開けられない。糞尿投擲作戦だった。

『蒙古襲来絵詞』には何が描かれているのか、本書では、これまでの研究者が誰も指摘してこなかった、新しい読み方を示す。読者はきっと本書の読み方に納得されるであろう。

以上、本書での蒙古襲来像・『蒙古襲来絵詞』分析の概要・骨子をガイダンスとしてあらかじめ示してみた。以下、詳細に具体的に述べていく。

なお本書が批判の対象とする通説（神風史観）は、東京帝国大学教授であった東洋史家の池内宏『元寇の新研究』（一九三一年）に代表される。一〇〇年近くにわたって、アカデミズムの場でも教育の場でも君臨してきた。池内宏に批判的であった同時代の歴史学者に中山平次郎（九州帝国大学医学部教授）がいる。本書は中山の指摘に大きな示唆を受けており、中山視点を継承しつつ、飛躍的に発展させる。

また『蒙古襲来絵詞』についても多数の研究があるので、そちらは必要に応じて言及、紹介したい。